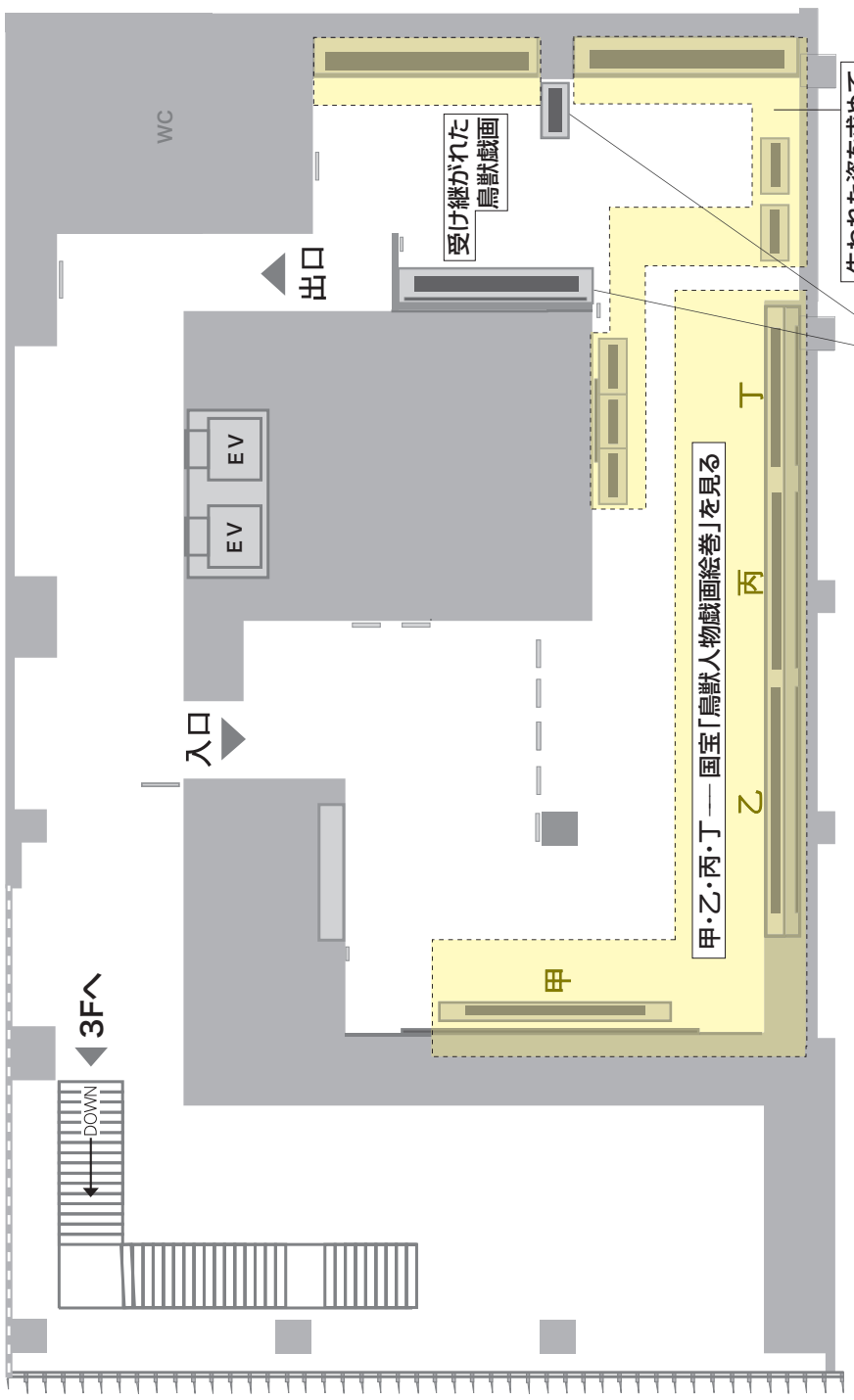
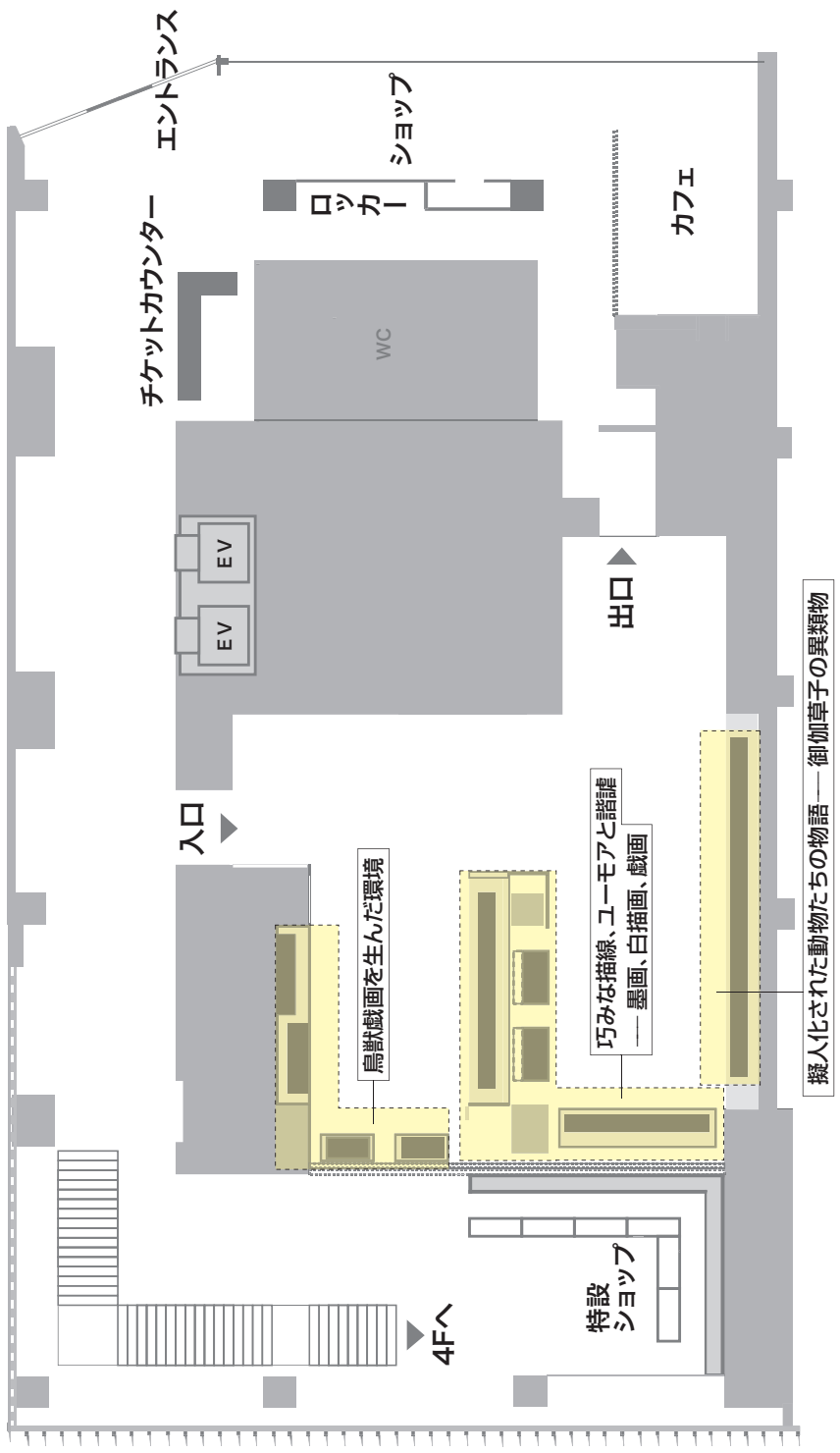
4階展示室：第一章　鳥獣戯画のすべて



3階展示室：第二章　鳥獣戯画の系譜



開館記念特別展

鳥獣戯画がやってきた！

── 国宝「鳥獣人物戯画絵巻」の全貌

展示替リスト　2007年11月3日(土)～12月16日(日)

※都合により展示期間が変更になる場合がございます。ご了承ください。

No.	指定	作品名	筆者	所蔵先	前期 11/3～11/12	前期 11/14～11/19	前期 11/21～11/26	後期 11/28～12/3	後期 12/5～12/10	後期 12/12～12/16
第一章　鳥獣戯画のすべて										
甲・乙・丙・丁── 国宝「鳥獣人物戯画絵巻」を見る										
1	国宝	鳥獣人物戯画絵巻　甲巻		高山寺	前半部分			後半部分		
	国宝	鳥獣人物戯画絵巻　乙巻		高山寺	前半部分			後半部分		
	国宝	鳥獣人物戯画絵巻　丙巻		高山寺	前半部分			後半部分		
	国宝	鳥獣人物戯画絵巻　丁巻		高山寺	前半部分			後半部分		
失われた姿を求めて── 鳥獣戯画復元の旅へ										
2		鳥獣人物戯画絵巻　模本（長尾模本）	伝土佐光信	ホノルル美術館	2週間毎に場面替え					
3		探幽縮図	狩野探幽		2週間毎に場面替え					
4		探幽縮図	狩野探幽	京都国立博物館	2週間毎に場面替え					
5		鳥獣人物戯画絵巻　断簡		東京国立博物館						
6		鳥獣人物戯画絵巻　断簡								
7		鳥獣人物戯画絵巻　断簡		MIHO MUSEUM						
8		鳥獣人物戯画絵巻　模本（住吉模本）		梅澤記念館	2週間毎に場面替え					
9		鳥獣人物戯画絵巻　断簡		MIHO MUSEUM						
受け継がれた鳥獣戯画										
10		是害房・鳥獣戯画絵巻		ホノルル美術館	前期と後期で場面替え（2週間毎に若干の巻き替え）					
11		滑稽図巻	狩野永納		前期と後期で場面替え（2週間毎に若干の巻き替え）					
12		鳥獣人物戯画巻	田崎草雲	栃木県立博物館	前期と後期で場面替え（2週間毎に若干の巻き替え）					
13		鳥獣戯画（画稿）	河鍋暁斎	河鍋暁斎記念美術館	（猫、狸の図）			（狸、狐、梟の図）		
14		暁斎画談	河鍋暁斎画	河鍋暁斎記念美術館						
第二章　鳥獣戯画の系譜										
鳥獣戯画を生んだ環境										
15	重文	不動明王像（鳥羽僧正様）		醍醐寺						
16	重文	不動明王像	信海	醍醐寺						
17	重文	十二神将図像		醍醐寺						
18		年中行事絵巻　模本	住吉広行	東京藝術大学大学美術館	前期と後期で場面替え					
巧みな描線、ユーモアと諧謔── 墨画、白描画、戯画										
19		墨書土器（長屋王邸宅跡出土）		奈良文化財研究所						
20		玄証本　阿弥陀鉤召図								
21	重文	将軍塚絵巻		高山寺	前期と後期で場面替え					
22		勝絵絵巻		三井記念美術館	前期と後期で場面替え					
23		放屁合戦絵巻		サントリー美術館	前期と後期で場面替え					
24	重文	善教房絵巻		サントリー美術館	前期と後期で場面替え					
25		西行物語絵巻		サントリー美術館	前期と後期で場面替え					
26		新蔵人絵巻		サントリー美術館	前期と後期で場面替え					
擬人化された動物たちの物語── 御伽草子の異類物										
27		雀の小藤太絵巻		サントリー美術館	前期と後期で場面替え					
28		鼠草子絵巻		サントリー美術館	前期と後期で場面替え					
29		藤袋草子絵巻		サントリー美術館						

「鳥獣戯画」甲巻の復元をめぐって

「鳥獣人物戯画絵巻（鳥獣戯画）」といえば、動物たちの愉快な表情が楽しめる甲巻が有名だ。この甲巻、実は制作当初の状態からかなり改変があったと思われる。これまでの研究による指摘をまとめてみよう。

■甲巻前半と後半部で違う巻物だった

甲巻の前半部には、何かで損傷した跡が規則的に続いているのだが、後半部にはその跡がない。つまり、以前は甲巻前半と後半部で違う巻物だったことになる。

■今の甲巻にはない、別のまとまった部分があった

今回展示される5〜7の断簡は、画風などから、もとは甲巻の一部だったと考えられるもの。そのうち、5の断簡は、甲巻の後半部分につながりそうなところがあるのだが、6と7は、甲巻のどこにも図柄がつながらない。実は、8の模本にまるまる一巻分、現在の甲巻にはない場面が写されていて、そのまとまった部分がごっそり失われたことがわかる。現在はその一部が断簡として残っており、それが6と7なのだ。

■甲巻はかつて二巻だった

甲巻前半部には損傷の跡が見られるが、実は断簡6と7にも損傷の跡がある。そこで模本を参考に、絵巻の一部だったときを想定して断簡を並べ、そのあとに甲巻前半部を並べてみると、損傷跡が規則的に続いていくことがわかった。つまり、

Ⓐ 損傷を受けた巻：断簡を含む住吉模本一巻分の原本＋甲巻前半部

Ⓑ 損傷を受けていない巻：甲巻後半部

の二巻構成だったということになる。非常に説得力のある説だが、損傷跡によって遡ることができるのは損傷当時までであって、制作当初の状態とは言えないのが問題だ。

■甲巻は3つのグループに分かれる

損傷跡から判断すると、甲巻は、前半部と後半部に分けられ、画風から見ても、前半部と後半部で筆者が違うようだ。しかし、損傷跡からすればつながるはずの断簡と甲巻前半部の方は、画風が違っていることや、場面としてのつながりが不自然であることなどから、制作当初の時点ではつながっていなかったのではないか、とも言われている。

いずれにせよ、何巻だったかは別として、少なくとも3つのグループに分けることが可能だ。

Ⓐ 甲巻前半部

Ⓑ 5の断簡＋甲巻後半部

Ⓒ 6･7の断簡を含む住吉模本一巻分の原本

「鳥獣戯画」の主題をめぐる諸説

「鳥獣戯画」四巻の主題については諸説ある。

・平安末の退廃した貴族や僧侶、あるいは新興の武士を風刺したという説

・仏教の六道思想に基づき人畜界や畜生界を描いたとする説

特に甲巻については

・『今昔物語集』などに見られるような動物説話を絵画化したという説

・年中行事を動物が行っている様子として描いたという説

・疫神を鎮めるための御霊会（ごりょうえ）を表したという説

・擬人化された動物が神霊を慰撫する機能を持つという説

・月が出る秋の夜が舞台になっているとする説

・演者が動物に扮する今様（いまよう）との関わりを指摘する説

・稚児（ちご）のために制作されたという説

など、さまざまな説が唱えられている。また、乙巻についても、

・動物の絵を描くための手本説

・子供向けの図鑑説

など、その用途についての可能性が指摘される。

文献上では「シャレ絵」「獣物絵」「戯画」と呼ばれていたらしいが、そもそも内容がわかる詞書もないので、文字史料から読み取れる情報も限られている。主題の読解は私たちの想像力と考察力に託されているのだ。

「鳥獣戯画」の筆者について

一般に、「鳥獣戯画」は鳥羽僧正（とばそうじょう）が描いたと言われている。しかし、鳥羽僧正が生きたのは12世紀前半まで、「鳥獣戯画」は12世紀後半以降の作と考えられるので、鳥羽僧正を筆者と考えるのはどうも難しいようだ。

ではいったい誰が描いたのか。これまでの研究では、密教の絵仏師が描いたという説と、宮廷絵師が描いたという説がある。確かに、密教の白描図像（はくびょうずぞう）には「鳥獣戯画」の動物とそっくりの描写が見出せるし、かたや、宮廷絵師が描いた「年中行事絵巻（ねんじゅうぎょうじえまき）」には、「鳥獣戯画」甲巻から飛び出したような動物の造り物が出てくるなど、いくつもの関連性が見出せる。さて、どちらが正しいのだろうか。あるいは両方を手がけた絵師によるものなのか？ まだ結論は出ていない。

鳥獣人物戯画絵巻 乙巻（部分）　高山寺蔵

十二神将図像（部分）　醍醐寺蔵

年中行事絵巻 模本（部分）　東京藝術大学大学美術館蔵